

地公退ニエース

No. 140
2018. 4. 16
定価一部20円
(会員の購読料は
会費の中に含む)

発行所

東京都千代田区六番町一 自治労会館2F
地方公務員退職者協議会

031326215546

地公退は一月二五日恒例の合同学習会を開催 何故、菅官房長官の会見に臨むのか、安倍政権とメディア

講師：東京新聞 望月衣塑子 記者

昨年六月、菅官房長官の定例記者会見テレビ中継。いつもと違った光景が見られた。一人の女性記者が「しつこく」食い下がる。東京新聞・望月衣塑子記者だ。私たちが菅官房長官会見のニュースをみていて、「そのような指摘は当たりません」「まったく問題ありません」など、とぼけた答弁で終わるたびに、「なぜもっと突っ込まないんだよ」「こう聞けばいいのに」と思うことも度々だった。望月さんの姿はメディアに対する期待を呼び起こした。

安倍内閣は「特定秘密保護法」で、国民の目に触れさせたくない文書を機密扱いし（表向きは「我が国の安全保障に関する情報のうち特に秘匿することが必要であるものの保護」）、南スーダンの国連平和維持活動（PKO）に派遣している自衛隊の日報は「隠し・破棄」、そして、いまだ明らかにならなかった決済文書の抜き取り・書き換えなどの文書「改ざん」など、徹底した「隠蔽」体質内閣だ。

これに対するメディアの対応は、地公退が二〇一四年総会方針以来指摘してきたように「……政権の意向を忖度したメディアの萎縮が顕著になっている。また、主要なメディアの一部は読売・産経新聞のように社是として露骨に自民党政権擁護をしている。……市民は事実を知り、それを自ら判断して行動・発信する必要がある。」状況になっている。さらに安倍政権はこの後「放送法」改悪を狙っているとも言われている。このような問題意識から一八年一月の地公退・自治退合同学習会で望月さんから「何故、菅官房長官の会見に臨むのか、安倍政権とメディア」の講演を受けた。

記者が取材をどのように行い、どのような記事にするか。そこにこめる思いは何か。私たち読者にはなかなか伝わらない。今回は記者としての思いを直接本人から聞く機会を得た。ときどき菅官房長官の口調を真似ながらの「望月節」講演だった。

記者としての私のテーマ 「権力側が隠そうとすることを明るみに出すこと」

昨年二月九日、朝日新聞がスクープします。「財務省近畿財務局が森友学園への国有地の売却価格を非公表とし、その金額が近隣国有地の一〇分の一である一億三四〇〇万円だ」と報じました。いま現在にもつながる「森友問題」が初めて表面化した瞬間でした。私の勤める東京新聞は当初反応が薄かったのですが、「森友学園の名譽校長を安倍首相夫人、昭恵さんが務めていた。一地方の問題ではない」との予感から、編集局長に「東京新聞も追うべき」と進言し、森友問題の取材チームの一員となりました。

続いて五月一七日、再び朝日新聞が、加計学園問題で「総理のご意向 文科省に記録文書」をスクープします。安倍首相の刎頭の友加計氏に便宜をはかったのではというものです。菅義偉内閣官房長官は「全く、怪文書みたいな文書じゃないか。出どころも明確になっていない」と述べます。出どころはどこか、といわれているうちに、五月二二日、読売新聞が「前川前次官 出会い系バー通い 文科省在職中、平日夜」との見出しで、前文部科学事務次官前川喜平氏（天下り問題で退職済み）が在籍中に新宿歌舞伎町の「出会い系バー」へ頻繁に通っていたことを報道します。

私自身は読売新聞への尊敬の思いもある（一時期「読売新聞に移ろう」とぼぼ決めた直後に、父の「お父さん、読売だけは嫌なんだよ」の言葉で東京新聞に留まった）中で、違法行為を犯したわけでもない官僚の私的行動をネガティブに報じるのにはおどろきました。「事件に強い読売新聞がなぜ」と思い、六月一日、前川氏に三時間五〇分のインタビューを行いました。この人（前川さん）は心の底から信頼できるのか、直球での質問を繰り返しました。事実と憶測をきっちり分ける話し方に誠実さを感じました。教育への思いを熱く語り、さらに改正前の教育基本法の前文を暗誦しており、質問には理路整然と答えてくれました。現状の教育に対して忸怩たる思いを募らせていること、教育基本法の改正が行われた際、とくに官僚の立場で意見することができなかったが、民主主義が壊されて行くのではないかと感じたことなどが語られました。「前川さんや告発者の思いに込めたい」そう考えた私は、攻める対象を菅官房長官し

かないと思いい、首相官邸のHPで、菅長官の定例会見の映像をいくつかチェックしてみました。「えっ、これで終わりなんだ？」拍子抜けしてしまいました。記者の質問に、表情を変えず「ご指摘には当たらない」「問題ないと思われます」と返されて、記者たちは質問を重ねない。これはもう、自分が出なきゃ。扉を開けました。

官房長官の会見には、たいてい各社の政治部の記者が出席しています。社会部の記者である私は、それまで一度も官房長官の会見に出席したことはありませんでした。六月六日、あっけなく終わってしまいそうな雰囲気思わず手をあげました。「東京新聞、望月です」質問する時には必ず媒体名と名前を名乗るルールにのっとり、文部科学省の前事務次官、前川喜平さんに関するいくつかの質問をしました。「杉田副長官は、通常、前川事務次官級の方々の身辺調査や行動確認をしている、ということなのでしょうか」「承知しておりません」。質問を重ねるうちに、進行役の男性から「質問は簡潔にお願いします」と初日から注意されてしまいました。「こういうバーに官房長官が実際に足を運ばれてみてはいかがでしょうか」

六月六日の午後、フリージャーナリストの伊藤詩織さんにインタビューを行いました。八日前、性的な暴力を受けたとして、当事者としては極めて異例となる、顔と名前を公表した記者会見で訴えていたのが詩織さんでした。相手は、TBSで長く政治部記者を務め、ワシントン支局長などを歴任し、退社後はフリージャーナリストに転身していた山口敬之氏です。逮捕直前まで行っていた案件が、当時の警視庁刑事部長、中村格氏の指示で取りやめになりました。なぜ逮捕が直前で中止になったのか。なぜ徹底的に調べなかったのか。東京新聞では詩織さんの会見はベタ記事扱いでした。被害者が泣き寝入りしなければいけない現在の法の問題点を追及するために、社会的な使命感を持って表舞台に出てきたと感じました。その夜は悔しさをシュックで眠れませんでした。前川さんや詩織さんは見えな巨大な権力に向かっている。なぜ、政権がここまで横暴を働き続けられるのか。わたしは傍観者でいいのか。直接菅官房長官に彼らの怒りと思いをぶつきたい。六月八日、二回目の会見に臨みました。ふたたび会見に臨んだ私は、前回にも増して多くの質問をしました。質問数は二三、早いときは五分もかからない定例会見が三七分間にも及びました。「詩織さん」準強姦事件で、上層部のストップ

